

SNSを活用したストーリー中心型カリキュラムの提供

Offering the story-centered curriculum with SNS

北村 隆始^{*1,2}, 田中 光子^{*1}, 星野 早苗^{*1}, 根本 淳子^{*2}, 渡邊 あや^{*2}, 鈴木 克明^{*2}

Takashi KITAMURA^{*1,2}, Mitsuko TANAKA^{*1}, Sanae HOSHINO^{*1},

Junko NEMOTO^{*2}, Aya WATANABE^{*2}, Katsuaki SUZUKI^{*2}

*1 テルモ株式会社 *2 熊本大学大学院教授システム学専攻

*1 Terumo Corporation *2 Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

Email: rkitamura@st.gsis.kumamoto-u.ac.jp

あらまし: ストーリー中心型カリキュラムの提供において、実践的な教育効果と既存リソースの活用による効率化が求められている。教育効果と既存コンテンツの利用の実践例はあったが、ストーリー展開の提供に関しては、専用の Web Site (表示画面や認証システム) などの提供が必要であり効率化した例は少なかった。ストーリー展開の提供に関して SNS 型コミュニケーションプラットフォームを利用した効率的な方法と共に、コミュニティー機能を活用した協調学習の場の提供を提案した。

キーワード: ストーリー中心型カリキュラム, ゴールベースシナリオ理論, SNS, 看護教育

1. はじめに

ストーリー中心型カリキュラム⁽¹⁾ (以下 SCC) の提供において、実践的な教育効果と既存リソースの活用による効率化が求められている。SCC の教育効果と既存コンテンツの利用に関する実践例はあるが、ストーリー展開の提供に関しては、専用の Web Site (表示画面や認証システム) 若しくは LMS などの提供が必要であり効率化した例は少ない。

本研究では、ゴールベースシナリオ理論に基づく SCC を利用した先行研究⁽²⁾ (Schank 2005, 鈴木ら 2007) を調査し、ストーリー展開の提供に関して SNS 型コミュニケーションプラットフォームを利用した効率的な方法を提案する。

2. SCC の提供方法

トレーニングラボ (テルモメディカルプラネックス) にて対面型の看護師指導者向け「インジェクショントレーナー養成コース」を開講 (2008 年トライアル・初回コースを 2 回実施) した。受講者がより実践的なイメージを得られるよう 2009 年コースより、各セッションは変更せず、カバーストーリーを用意し SCC 導入を試みた。コース開催後は、対象者である全国 17 名の現役看護師の受講者に第 1 日目に SNS への登録方法と SCC の説明、および第 1 回目のストーリーを提示する予定である。

本発表では、コース開催の直前までの準備段階に絞った SCC 部分のみ形成的評価を報告する。SCC の提供 Site は、既に医療従事者に登録制で公開されている SNS 型の地域医療のためのコミュニケーションプラットフォーム「クリニカルジョイントTM」⁽³⁾ (以下 SNS 型 CJ) にコミュニティーを開設し搭載する (形成的評価は試用版で実施)。

また、ストーリー展開の提供 Site を SNS 化しただけでなく、SNS の本来持ち合わせる、コミュニティー機能を活用し、報告書提出を公開することでピアフィードバックによる協調学習の場も提供する。

3. SNS 上での SCC 提供結果

基本的なカーバーストーリーや登場人物は、輸液適正使用推進資料 (漫画) のキャラクターを利用した。受講者は主人公『若葉てるも』になったつもりで SNS 型 CJ にアクセスする。

3.1 SNS 型 CJ 上での具体的な機能

事務局がコミュニティーを開設し、コミュニティー名や参加条件 (管理者承認が必要かつ非公開)、コミュニティー説明文 (受講者へ呼びかけ)、そして、コミュニティートピック (掲示板) を設定する。トピックが SCC の主たる提供場所 (4 箇所) となる。

- 1) 幸田師長の部屋, 2) ユニカの部屋
- 3) 幸田師長への報告書提出部屋
- 4) てるもの部屋

各トピック、対面型トレーニング実施前後にアクセスすることで SCC を実行する。

- 1) 幸田師長の部屋

課題を提出先の上司として幸田師長を設定。「幸田師長の部屋」トピックは、「使命」「カバーストーリー」を受講者へ提示する機能となる。トピックの説明には、この部屋の基本的な使用方法を明記する。

画像添付機能 (3 枚以内) を利用し、幸田師長の顔・病院の概要・登場人物の関係図 (「役割」に該当) を表示した。

初回投稿時には主となるカバーストーリーを提示し、受講者『若葉てるも』が何故このコースに参加することになったかの経緯と参加後の報告書の提出を求める説明をした。2 回目以降、対面型トレーニング実施前に、幸田師長からの「使命」を受けて参加することになる (書き込みには師長の顔を添付)。

- 2) ユニカの部屋

同僚としてのユニカを設定。ユニカの部屋は、「情報源」を受講者へ提供する機能が主となる。各回の必要な学習内容と関連する教材をユニカとの会話中でガイドする。登場人物を他にも設定し、話題に上

ることで、シナリオの興味を高める工夫をした。

3) 幸田師長への報告書提出部屋

「使命」を遂行する為、対面型トレーニング後、リフレクションしながら「インジェクショントレーナーとして、指導の際にどんなことが利用できそうか」「日ごろから直ぐにでも実施してみたいことはあるか」「その他（感想など）」を報告書としてまとめる。この段階が、「シナリオ操作」にあたる。

一方、先行研究とは報告書提出の点で一致しているが、提出後は教員からのフィードバック中心であり、受講者相互の共有はできていない。本研究では、SNS 本来のコミュニティー機能を活用し、報告書を公開することで受講者相互の協調学習を付加した（「フィードバック」にあたる機能）。

4) てるもの部屋

受講者同士のコミュニティーとして幅広く利用できる。「情報源」としての機能も果たす。

3.2 SNS 型 CJ とゴールベースシナリオ理論

SCC はゴールベースシナリオ理論（以下 GBS）に基づいている。本研究も GBS の 7 つの構成要素を設定しているが、トピックごとに割振ることで GBS に基づいた設計が明確になる（3.1 に既出しているが、整理すると表 1 の通り）。また、先行研究の根本・鈴木（2005）による GBS 理論の適応度チェックリスト⁽⁴⁾を利用し、適応度も確認した（同表 1 参照）。

表 1 GBS の構成要素の設定

GBS 構成要素 ：適応度	SNS の設定
使命：100%	幸田師長の部屋；各回書込み
カバーストーリー：80%	幸田師長の部屋；初回書込み
役割：100%	幸田師長の部屋；添付画像
学習目標：100%	
シナリオ操作：50%	報告書作成
フィードバック：100%	幸田師長への報告書提出部屋
情報源：100%	ユニカの部屋（幸田師長の部屋、てるもの部屋も含む）

3.3 SCC 部分の形成的評価

通常、形成的評価⁽⁵⁾は 1 対 1 評価、次に小集団評価を行い、最後に実地テストを行うが、今回は 5 名（コース内容を知る社内看護師が中心）の協力を得る事ができた為、あらかじめ用意した観察プラン・経過時間記録用紙（初回ストーリーのみ実施）・アンケートを使用し小集団評価を行った。

結果、経過時間からは本 SNS 型 CJ の地図に連動した所属施設の設定に時間を要することが分かった。

アンケートは、22 設問中、①SNS デザインや使用方法の項目が 6 問、②ストーリーの内容の項を 16 問用意し、肯定的な項目から否定的な項目まで 1～5 段階のスケールとした。結果全体平均が 2.41、①の平均が 3.07、②の平均が 2.16 となった。①の項目中「幸田師長への報告書提出部屋」の使い方と、「てるもの部屋」を利用の項が否定的な意見が多かった。

一方、②では、ほとんどのスケールが 2 となり肯定的であった。

最後にヒアリングでは、20 の意見が出ていたが大別すると、①の項目が 8、②の項目が 6 に加えて、③運用に関する項目が 4、④当日の LAN 環境が十分でなかった項目が 2、となった。④を除いて検討する必要がある。

4. 考察

SNS 型 CJ を利用し、GBS 理論に沿った構成要素を適応度チェックリストで整理しながらトピックに毎に設定することで、容易に SCC を実施することができた。専用 SCC の Site を用意することなく、効率的に公開および修正が可能となった。また、受講生同士のピアフィードバックの環境も提供できた。

一方、形成的評価からは①の項目中「幸田師長への報告書提出部屋」の使い方に関しては、ヒアリングの内容と合わせると、ヒアリングの①から協調学習であるが故に最初に提出した人の提出ボリュームが影響するとの意見や、③運用面で報告書の提出率に疑問を感じない意見があり、SCC 開始前のオリエンテーションでの報告書の重要性を充分説明することが必要であることが示唆された。また、報告書の例示は、ボリュームの参考になるが、内容面に誘導がかかってしまう可能性がある為、今回は「フィードバック」にて 2 回目以降で改善を促すこととする。

アンケートの②の項目は肯定的であるが、ヒアリングの②からも、話がくどいなどがあり、「ユニカの部屋」との重複等も是正して行く。

5. 今後の課題

本報告では、形成的評価の段階まで実施したが、今後は、考察から導き出された方向性に従い、SCC を改善しコースに沿って受講者の報告書や事後アンケートをもとに実地テストを実施していく。

参考文献

- (1) Schak,R.C.,Berman,T.R.,&Macpherson,K.A.:”Learning by Doing” In Reigeluth,C.M.(Ed.), Instructional-Design Theories and Models: A New Paradigm of Instructional Theory Volume II,pp161-182(1999)
- (2) 熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻:”IT 時代の教育イノベーター育成プログラム—グローバル人材育成を主導できる、e ラーニング専門家の養成”,文部科学省平成 19 年度大学院教育改革支援プログラム年次報告書,pp23-73 (2007)
- (3) 鈴木雅隆, 永松康能, 小川芳幸:”IT 技術を活用したコミュニケーション手法の地域医療連携への応用可能性—地域医療のためのコミュニケーションプラットフォーム「クリニカルジョイント™」の創出” IT ヘルスケア学会抄録集 4 (1) ,pp38-41 (2009)
- (4) 根本淳子, 鈴木克明: “ゴールベースシナリオ(GBS)理論の適応度チェックリストの開発”, 日本教育工学会論文誌 29(3), pp.309-318 (2005)
- (5) 鈴木克明:”教材設計マニュアル独学を支援するために”,北大路書房,京都 pp95-128(2002)